

TILES

タイルの本

12

DECEMBER
2014
NO.84





図6 「目を開けたまま見る夢」完成



図5 モザイク設置の様子



図4 部分

パメラ・アーヴィング (Pamela Irving)
1960年オーストラリア、メルボルン生まれ。
1982年からフルタイムのモザイク作家として活動を始めた。
世界各地の展覧会に出品。海外交流も活発に行っている。
オーストラリアモザイク協会副会長、国際現代モザイク作家協会会員。



世界の モザイク作家たち

その 5 パメラ・アーヴィング
Pamela Irving

目を開けたまま見る夢—メルボルンの遊園地

by Toyoharu Kii

[翻訳/モザイク作家 喜井 豊治]



図2 部品運搬中



図3 部分



図1 メルボルン遊園地入り口

この笑顔のフェイスが、私の夢に出てくる奇妙な生き物に囲まれている。作品のタイトルは「目を開けたまま見る夢」だ。(図2、3、4、5、6)

2010年、最初の作品のお披露目の後、もう一か所の注文を受け、さらにその後にも注文は続き、結局この遊園地で4年の間作品を作り続けることになった。最後の作品の除幕式にはオーストラリアの首相も列席して2013年に行なわれた。

制作はほとんど一人で行なったが、取り付けには人を雇った。私が作ったモザイクの面積のトータルは200㎡になった。使用した素材はタイルとセラミックのオブジェとズマルト。じつは私がおも好きなのは、コップやジョッキや古いお皿や磁器の人形などの生活雑貨である。それぞれの物がそれぞれの世界を持っている。いくつかの磁器の食器はまさにこの遊園地で掘り出されたものだ。

1980年代、今遊園地になっている場所はゴミ捨て場だったのだ。近くを探せば壊れたお皿などは今でも簡単に見つかる。それが作品の一部になった。

それぞれの作品には制約と課題がある。テーマ、設置場所、設置期間、天候、設置方法や予算に合わせて制作をする。作品は設置さ

オーストラリアにはプロのモザイク作家は少ない。壁面の注文は少なく、ガラスや大理石の素材の輸入は高くつく。素材としては陶磁器が入手しやすいから、タイルモザイクが多い。モザイクに対する一般的な興味は低く、画廊などもモザイクには関心を示さず、趣味的な工芸の一種とされている。なんだか日本の話を聞いているような気がするほどだが、ほかの国に行っても同じような話を聞く。

パメラ・アーヴィングは動物や人間の立体的なオブジェをタイルで作る。ちよっとユーモラスな雰囲気を持ち味だ。(喜井)

2010年、メルボルンの遊園地に大きなモザイクを作ることになった。大人にも人気のメルボルン随一の観光スポットだ。遊園地の入り口は大きな目と歯のある顔になっていて、口を通して中に入る印象的なつくりになっている。(図1)



図7 メルボルン消防本部「炎の伝説」1982年



図8 「炎の伝説」部分

●喜井豊治 (きい・とよはる)
モザイクアトリエ ING 主宰、武蔵野美大通信部非常勤講師、モザイク会議元議長、国際現代モザイク作家協会会員、アメリカモザイク協会会員
<http://www015.upp.so-net.ne.jp/kiiing/>

れる場の表現であるべきだと私は考える。それはときに思索を促すものであり、ときにはダイナミックに作者のメッセージを伝えるものになる。この遊園地の作品には力強い表現が欲しかった。なにしろ一日に何千人もの客が訪れるのである。にぎやかに、活発に、ハッピーに遊ぶ場所だ。こちらも力強くなければいけない。

最近、私はメルボルンの個人邸に70㎡のズマルトを使った壁画を作った。ローマ時代のアフリカやヨーロッパのモザイクにヒントを得た。モザイクは建築の表情をうまく補完するものに仕上がったと思っている。

オーストラリアのモザイク壁画の中で私が特に気に入っているのは「炎の伝説」と名付けられたハロルド・フリードマンの1982年の作品だ。プロメテウスが人類に火を伝える神話の場面が描かれたこの美しいモザイクはメルボルンの消防本部の外壁を飾っている。大きな壁が神話のスケールの大きさに合致している。設営場所、サイズ、できばえなどはパブリックアートとして素晴らしい成例だと私は評価している。(図7、図8部分)

(本稿は、パメラ・アーヴィング氏から寄せられた文章を喜井豊治氏が翻訳したものです。【編集室】)